2024
3月号
第406号

教区だより

真宗大谷派京都教区 教化広報誌

Shinran 550th

〈座談テーマ〉
南無阿弥陀仏
人と生まれたことの
意味をたずねていこう

今月の「ことば」

あなたの立場は
正しい
僕の立場も
正しい

今月の「ことば」は、教区駐在教導が担当しています

CONTENTS

2・3面
今、この時に、親鸞聖人に遇う
長浜教区第16組 蜂屋良生（はちや よしお）氏
石東組 藤浪遊（ふじなみ ゆう）氏

4・5面
特集 男女両性で形づくる教団を目指す研修会
男女共同参画部会
石西組 河野緑（こうの みどり）氏
石東組 幡谷直（はたや すなお）氏
出版部会 藤野顕生（ふじの あきお）氏

6面
特集
仏事をとおして聞く
出版部会 井上至（いのうえ いたる）氏

7面
教務所からのお知らせ
イマダカラ

8面
今月の行事予定

京都教区内の風景をお届けしています。『教区だより』では表紙写真の募集を行っております。詳しくは教務所（教区駐在教導）までお気軽にお問い合わせください。

今、この時に、親鸞聖人に遇う

人と出会い 教えに出遇う

長浜教区第十六組 徳満寺（とくまん） 住職
蜂屋（はちや） 良生（よしお）

私は、今、人と会うことが仏の教えを聞いていくうえで非常に大切であると感じています。

私はお寺に生まれましたが、お寺に帰るまでの二十四年間、鉄道の仕事に携わりました。

当時の私は上昇志向が強く、自分が積んだ経験によって実績を上げ、新しい事業に携わることを目指していて、そのサービスの実現を誇りに感じてきました。しかし、実際の私の仕事は、お客様の声と現場で働いている社員の声によって支えられていました。また、人と会い、話を聞いて、語り合って、関係を創り上げていくことで私が育てられてきたのではないかと思います。お客様の声を聞くことはつらく厳しいことでしたが、自分の周りで起こっていることを「自分ごと」として受け止めることができるかどうかが課題となっていました。いかに「周囲の人の声」を「私を促す声」として「自分ごととしていくか」は現在も私の聞法の課題となっています。真宗の教えを聞いていくなかで、自分の人生を振り返りながら、もう一度大切なことを学ばせていただいています。

人を通じて教えに出遇っていくこととして、長浜教区では「共学研修院」という大谷派教師が親鸞聖人の教えを学びなおす「学び舎」が二〇二〇年にスタートし、私も研修生として学ばせていただきました。その最初に言われたことが「私は一人では学べない。一生共に学べる師と友を作れ」ということでした。ここで実感したことは、自分と異なる考え方や受け止め方に出会わないと、私自身の学びが深まっていかないということでした。私の学びの姿勢をもう一度、問い返される場でもありました。あらためて人と会って語り合うことの大切さを感じています。

もう一点、学ばせていただいたことは「原点に還る」ということです。これはお聖教の言葉に素直に向き合うということでした。私は教えを聞きながら、自分の生活に役立つという観点でしか受けとっていないのではないかということを問いかけられました。自分の立ち位置をもう一度確かめて、修正していくことの大切さを教えていただいたと思います。長浜教区では、先輩方から常に「私たちは真宗門徒になれているのか」「寺はだれのものか」という問いかけをいただいてきました。これも私を常に原点に還らせていただく大切な問いかけです。真宗の教えには、生活の中で人を通じて教えに遇いつづけていくことでお互いが共に育まれていく関係があると思います。

教区改編という大きな節目を迎えますが、この機会をどう受け止めていくかは私一人にとっても大切な課題です。目先のメリット・デメリットにとらわれるよりも、この先の長い時間の中で、多くの人々との新たな出会いが創造されることに目を向けていきたいと思います。異なる風土や環境で育まれた人との交流は私たちの目覚めを呼び起こす機縁となることも多くあると思います。出会いの機縁を表す「啐啄同時（そったくどうじ）」という言葉があります。与えられるものを待つだけではなく、同時に私に求めるこころがあるか。そのこころを大切にしてまいりたいと感じています。

長浜教区の教化事業

長浜教区の教学教化部門「育成員研修会」の様子。ワークショップを行い、住職・坊守・若手寺族（衆徒）が世代別のグループに分かれて意見交換を行いました。教化本部企画室専任委員でもある蜂屋氏も、参加されています。

今、この時に、親鸞聖人に遇う

念仏をふかくたのむ

石東組 浄慶寺 住職　藤浪 遊

私はテレビでサッカーを観ていました。試合が終わりヒーローインタビューの最中、緊急地震速報が流れ、画面がニュース映像に切り替わりました。能登半島地震の発生でした。

発生から一ヵ月が経とうとしている現在、被災地では、いまだ多くの人が深い悲しみと、不安の日々を過ごしておられることでしょう。そのような中で宗派内にも現地に入り、支援活動を行っている仲間がいます。私も出来ることを行っていきたいです。

震災で知人がお連れ合いを亡くされたことに、とても大きな衝撃を受けました。そして、嫌なことはやり過ごし、したくないことは先送りして、だらだらとした日々を送っている私は、「今」を失っているのだと思い至りました。

「朝には紅顔ありて夕べには白骨」と何度も聞いていながらも、確実に「明日がある」と思い、様々なことをやり過ごし、先送りして生きている私がいます。改めて私たちには「今」しかないのだと知らされました。刹那的意味での「今」ではありません。賜ったいのちを大切にするということは、「今」を、「今日」を大切にすることでしょう。「今日の始末をどうつけるのか」ということが、「白骨の御文」の云う身の事実に立って生活していくということなのだと思います。高光大船氏は「信は生活にあり」とおっしゃいました。生活の中で念仏の教えをいただいて、確かめていくということです。普段の生活は誤魔化しようのない場所です。そこにこそ、教えを通していただかなくてはならないことや、気づかされることがあるのだと思います。

親鸞聖人は「世にくせごとのおこりそうらいしかば、それにつけても、念仏をふかくたのみて、世のいのりにこころいれて、もうしあわせたまうべし」（『真宗聖典』五六八頁『親鸞聖人御消息集』（広本）七通）とおっしゃいました。国内においては震災や集中豪雨といった大きな災害が頻発し、国外に目を向ければ戦争や紛争が常態化している「今」を私たちは生きています。不安や分断、孤独を感じざるをえない時代の中にあって、私自身も不安や悩み、問題を抱えています。そうした問題に立ちすくみ座り込む私に、御消息の言葉は、南無阿弥陀仏の呼び声は響いているのか、何を依りどころにしているのか、と問うてきます。念仏は私を包み、他者をも包み、世界をも包みます。念仏の教えは、「不安や悩み、問題をそのまま荷い、歩みなさい」と教えてくれています。「問題を課題として生きていきなさい」と教えてくれているのです。そしてまた「世のいのりにこころいれて」とは、時代社会から「私」が問われることに他ならないことだと思います。この時を生きている私を、時代社会から問われる私を、念仏申しながら、念仏のいわれに耳を傾け、明らかにし続けたいです。

「京都教区 インド仏教遺跡参拝の旅」2010 年 1 月（写真：藤浪 遊）

特集 男女共同参画部会

男女両性で形づくる教団を目指す研修会

京都教区教化推進本部 男女共同参画部会が、教区内八地区を巡回して開催してきた「男女両性で形づくる教団を目指す研修会」、今回は一月十三日(土)、石見地区(会所 石東組浄慶寺)での開催となりました。このたび参加された方々から、感想をいただきました。

石西組 西蔵寺門徒 河野 緑

「男女七歳にして席を同じくせず」。今では死語になってしまった言葉ですが、生活の中にどっぷりと染み付き「女は忍従が美徳」と躾けられ、兄達との差異に「変だな」と思いながらもジェンダーの意識を自覚する事なく大人になりました。

「男女平等」と言われながらも理不尽な性差別も多く受け、案外「女性の敵は女性」という場面が多くあった様に思います。

『教区だより』に「真宗教団の中の女性たち」という連載もあり、今回の研修会に期待しすぎだったのかもしれませんが、全体に時間が足りていない印象で、不完全燃焼だったように感じられました。真宗の教えの言葉にも、もう少し踏み込んでいきたかったです。

「衆生と共に」が根底にあるにも関わらず現実にはどうなのでしょう。「研修会」を実施しただけで、「男女両性について」の話し合いが足りず、中途半端に終わった感が否めませんでした。

真宗門徒として目指す「男女両性で形づくる教団」とはどの様な事かを聞きたかったし、語り合いたかったです。そして他の地区ではどの様に取り組んでいるのか知りたいと思っていました。

「忍従が美徳」とは決して思いませんが、自分で納得して差異を受け入れる事は差別でも忍従でも無いと思います。

世間の常識(性別役割分担等)が私の中にもあって、世間では…と、つい自分を正当化しています。「○○らしさ」や「△性はこうあるべき」と抜け切れない意識が無自覚の差別をしている事もあるかもしれません。私自身の課題として聞法を重ねてゆこうと思います。

◇

石東組 顕正寺 住職 幡谷 直

娘と一緒に参加させて頂きました。最初に講師の藤場先生から、さだまさしの『関白宣言』の歌詞について問いかけがありました。正直に言って何を言っているのかピンときませんでした。確かに一番だけ聞けば女性蔑視、女性差別ととらえられるかもしれませんが、全体を聞けばそうではない、家族愛を感じられる歌だと思われます。

その夜、娘から「父さんには何かしっくりこなかったんじゃ無い? 皿洗いもするし、洗濯も自分でするし、有難うも言うし」と聞かれました。

私は九州生まれで、若い時は食事も洗濯も片付けも母がやるのが当たり前、結婚してからも妻がやって当たり前の私でした。しかし妻が亡くなり、義母も亡くなり、残された義父の介護などを娘と二人でさせてもらってきました、

嫌でもやらなければなりませんでした。良いとか悪いとか、好きとか嫌いとか言っている暇は有りませんでした。本心を言えばやりたくなかった自分がいます。嫌々やっていましたね。

娘は、「石東組の住職さんや坊守さん達から、女だからということで、いじめられたり差別された事もないし、感じたこともない。周りの友達のあいだでは女性だからというだけでいじめられたり、差別されたりと言っている、ここでは感じたことも無い、可愛がってくれる」と言っています。

しかしその後数日がたち、改めて考えてみると、私の中に差別意識がないということではなく、私の中の心の奥に潜んでいる差別意識、男のくせに、女のくせにという思いを当たり前にしていた自分に気付かせて頂きました。私も差別者でした。気付かせて頂き有難うございました。

最後に藤場先生の話の中で、廣瀬旱先生の本に曽我量深先生の言葉で「仏教は内観が大事、自分の内側を見つめていくというけれど、その内側は自分で自分の心をのぞき込んでいるだけだ、本当はそうでは無い、本当は外側がそのまま見えることなんだ」という言葉、有り難く頂きました。

もう一つ感じたのは、伝えたいことが沢山あったのでしょうが、後半の講義が急ぎ足になり、ついていけない部分があったのが残念でした。

◇

出版部会　藤野顕生

二〇二四年一月十三日（土）、島根県浜田市の浄慶寺（石東組）にて、「男女両性で形づくる教団を目指す研修会」が開催された。当研修会は組織拡充小委員会が担当していた頃から教区内の各地区を巡回して開催されており、このたび石見地区（石東組・石西組）で開催の運びとなった。

講師は金沢教区常讃寺副住職、藤場芳子氏。女性室の元スタッフとしてジェンダーの問題に取り組んでこられた氏は「女性室がなぜ必要なのかわかりますか？それは教団全体が〝男性室〟だからですよ」と話された。男性室（＝男社会）たる教団が自身を男性室であるという視点に立てなかったということであり、ジェンダー構造の見えにくさをご指摘頂いたように思う。

講義の後、「あいあうカルタ」を使いながら班別座談が行われた。カルタにはユーモラスな中にもグサっと刺さる表現でジェンダーの問題に切り込む内容となっている（「教区会・組会男ばかりで　何決める」「ちょっと待って　私の予定は　聞かないの？」などなど）。自分のことを言われているようでドキッとすることも多々ありつつ、カルタを囲むことで発言しやすい雰囲気も生まれ、会話もはずんだ。

座談会の後のまとめの講義では「特権」というキーワードを中心にお話された。特権とは「考えなくてもいい立場にいる」ということである。特権を持つ人は特権を持たない人の生き辛さに中々気づけない。なぜなら考えなくても自分は困らないからである。聞法してこられた方の中に「自分は凡夫です」という方がおられるが、そのことに気が付いたのならば、自己関心にとどまらず自分の周りや社会のことが「気になっていく」ということがあるのではないだろうか、それが聞法していくということではないだろうか、とお話された。

参加された方からは「差別意識は無意識の中に植えつけられているのだな」「当たり前、仕方がない、と何の疑問を感じることなく過ごしてきた」といった感想を頂いた。ジェンダーの問題は見えにくい構造になっており、だからこそお互いの声を聞き合うことの大切さを学ばせて頂いた研修会であった。

特集 仏事をとおして聞く

身近にあって、普段、何気なく関わっている「仏事」について、わからなくてもただちに困ることはないでしょう。けれども、人にどう伝えていいのかがわからない、ということが、意外とあるのではないでしょうか。ここでは、普段あたりまえになってしまっているような「仏事」について、それぞれに聞いてきたことを確かめながら、ともに聞き合う場が広がることを願って、言葉にしてみます。(不定期連載)

第一回 「お経を読む」

出版部会 井上至

仏事を考える際に、最初に頭に浮かぶのは「お勤め」ではないでしょうか。われわれ真宗門徒のお勤めを定めてくださったのは、本願寺第八代、蓮如上人です。蓮如上人は「正信偈」・「三帖和讃」を開版して、親鸞聖人が説かれたお念仏の教えを広めてくださったのです。お勤めする意味について『蓮如上人御一代記聞書』には「『正信偈』・『和讃』は、衆生の、弥陀如来を一念にたのみまいらせて、後生たすかりもうせ、とのことわりを、あそばされたり。よくききわけて、信心をとりて、ありがたやありがたやと、聖人の御前にて、よろこぶことなり」『真宗聖典』八六一頁）とあります。「親鸞聖人が説いてくださった教えをよく心得て、信心をいただき、ありがたいことだと親鸞聖人の御影前でよろこぶ、その営みである」ということでしょう。

では「正信偈」・「三帖和讃」と同様にお勤めの際にお経を読みますが、どのような意味が考えられるのでしょうか。

七高僧の中で、お経を読むことについて示してくださったのは善導大師です。善導は『観経疏』「散善義」において、浄土に往生するための正行として読誦（浄土の経典を読誦する）、観察（阿弥陀仏と浄土のすがたを観察する）、礼拝（阿弥陀仏を礼拝する）、称名（阿弥陀仏の名号を称える）、讃嘆供養（阿弥陀仏の功徳を讃え、供養する）を挙げました。そして正定業である称名の助けとなる業として読誦を示しました。

また、ある研修会に出席した際に、講師の方からお経を読むのは「法要式」であるという話を聞きました。「「法要式」は阿弥陀仏の法の要を伝える儀礼である。法の要である三経一論（『仏説無量寿経』・『仏説観無量寿経』・『仏説阿弥陀経』・『浄土論』）を紐解いていき、共々にいただいていくのです」という内容でした。本山において考えてみると、お経を読むのは「春の法要」であり、「報恩講」の際には、お経は読まれません。一般の寺院においても、年忌法要の際にお経を読むことを考えると納得できます。

しかし、お経を読むことで、その内容は伝わっているのでしょうか。読誦する者、参詣している者、共にいただくことはできているのでしょうか。最近ではお経を現代語訳して、法要の際に読誦している寺院があるという話を聞きます。お経を現代語訳することによって、どのような内容が説かれているかが伝わりやすいという一方で、漢文で読誦される方がありがたいという話もあるそうです。また、何をもってお経を理解したのか、という意見も聞いたことがあります。一つ一つの言葉を理解したらそれで良いのか。蓮如上人の「御文」においても「釈尊が説いた教えを知り尽くしたとしても、後生の一大事について心得なければ愚者である」とあります。

様々なやり方がありますが、お経を読むということがなければ、そこに説かれている教えに出遇うことはできません。お経を読み、「正信偈」・「三帖和讃」をお勤めして、そこから親鸞聖人の教えをこの身にいただき、聞法生活に生きていく。それに尽きるのではないかと、私自身はいただいております。

教務所からのお知らせ

【敬弔】

ご生前のご功労を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

・近江第三組 福正寺 前住職　井上 教了　八十七歳

二〇二四年一月十一日

〔敬称略〕

【誤植の訂正・お詫び】

本誌二月号（第四〇五号）に掲載されました以下の執筆者の記名について誤りがございました。六頁は「廣瀬 江理子」氏ではなく「廣瀬 江里子」氏、七頁「編集後記」は「比叡谷 真」氏ではなく「藤野 顕生」氏でした。お詫びして訂正いたします。

教化伝道冊子『土着した親鸞』発刊のお知らせ

教化推進本部出版部会の出版事業「教化伝道冊子」の第一弾として、大桑斉氏の「土着した親鸞」を冊子化いたしました。本誌にて二〇〇九年四月から二〇一一年三月まで二年間連載されたものを一冊にまとめたものです。二百部限定で在庫がございます。聞法会で配布するなどご入用の方は、京都教務所までご連絡ください。販売はいたしませんが、ご懇志は謹んで拝受いたします。（担当・赤松）

イマダカラ

年齢を重ねたからでしょうか、ふとした時に、昔のことが思い出されることがあります。これまで思い出しもしなかったことが急に、しかも最近のことのようによみがえるのです。子どもの頃父と行った魚釣りで釣針に餌をつける時のにおいや感触、祖母と食べた固く白くなった羊羹のことなど。これはお迎えが近いのかな?と感じたりします。

二十五年前頃、社会では「国際交流」「グローバル化」が求められ、多くの諸大学に「国際学部」や「異文化コミュニケーション学科」といった学部や学科が新設されました。何かとカタカナ語で言い表すことが急増したのも、この頃からではないでしょうか。「欧米か!」というギャグも流行したくらいでしたから。

その頃、私は結婚という選択をし、相手の家族との同居生活が始まりました。他者と生活を共にするということは、相手の生活習慣(暗黙のルール)や価値観と、自分との違いを知ることでした。中でも食生活は食材から出汁や味噌、調理方法に至るまで、知らないことや異なることが多々ありました。それは長い間培われ、受け継ぎ引き継がれてきた風土や文化との出会いでもあり、同時に自分自身がこれまで育てられてきた風土や文化に改めて気づかされることでした。結婚は最も身近な異文化交流だ、と当時は大発見でもしたように感じたことを思い出しました。

（出版部会　前田 素子）

編集後記 The editor's note

「地元で新しく発見した精肉店に娘を連れて行った時、娘が鼻をつまんで「クサイ。」と言った。

娘の発言に驚き、店主さんに謝ったら「僕も昔は肉の匂いが苦手でした。子供は特に肉の匂いに敏感ですよ」と笑いながらお話しくださった。店員さんの言葉に救われた気がした出来事だった。

娘は正直な気持ちを口にしただけだろう。普段いただいているお肉がどのような過程を経て食卓に運ばれてくるのか。娘がもう少し大きくなったら、私も一緒に勉強(食育)し直そうと思った。

（出版部会　徳田 潤子）

京都教区 3 月の行事予定

教区・地区・関係団体事業

4日(月)	15:00～18:00	准堂衆会	教区会館 3 階 研修室
6日(水)	14:00～17:00	靖国問題学習会	教区会館 3 階 会議室
13日(水)	9:30～15:30	坊守会 基礎講座（zoom 併用）	教区会館 2 階 大講堂
13日(水)	16:00～18:00	准堂衆会 声明会	教区会館 3 階 研修室
25日(月)・26日(火)		得度学習会	教区会館
27日(水)～30日(土)		福島の子どもたち一時避難受け入れの会	となみ詰所

教区諸会議

1日(金)	10:00～16:30	新教区準備委員会	教区会館 2 階 大講堂
2日(土)	14:00～16:00	共同教化部会（仮称）地区組巡回懇談会 丹波第 1 組	丹波第 1 組 満林寺
5日(火)	13:30～16:30	教化推進本部 出版部会（Zoom 会議）	Zoom
6日(水)	14:00～16:00	共同教化部会 地区組巡回懇談会 石西組 ZOOM あり	石西組 専龍寺
8日(金)	13:30～16:30	改編進捗報告会	しんらん交流館
15日(金)	13:30～16:30	新教区準備委員会 常任委員会	教区会館 2 階 大講堂
21日(木)	15:00～18:00	育成研修部会	教区会館 3 階 会議室
23日(土)	15:00～18:00	共同教化部会 組訪問会議 近江第 26 組	安曇川公民館
29日(金)	13:30～16:30	新教区準備委員会	しんらん交流館

教区別院事業

4日(月)	19:00～21:00	伏 見	坊守学習会 法話 小川直人 師（山城第2組 長休寺）	伏見別院
5日(火)	12:00～13:00	赤野井	定例法要（教如上人）法話 中川眞 師（輪番）	赤野井別院
5日(火)	14:00～16:00	山 科	定例法話 法話 狐野やよい 師（三重教区 西恩寺）	山科別院
6日(水)	14:00～16:00	伏 見	声明作法講座 法話 浅井誠 師（山城第3組 皆演寺）	伏見別院
10日(日)	14:00～18:00	伏 見	同朋会・物故者追弔会・おみがき・お斎	伏見別院
12日(火)	13:30～16:30	山 科	同朋の会 法話 赤松崇麿 師（教区駐在教導）	山科別院
13日(水)	9:00～11:00	山 科	おみがき	山科別院
14日(木)	14:00～17:00	山 科	蓮如上人御廟所清掃奉仕	山科別院
20日(水)	14:00～16:00	山 科	春季彼岸会	山科別院
20日(水)	14:00～16:00	大 津	春季彼岸会・永代経総経 法話 圓山亜美 師（東北教区 教圓寺）	大津別院
21日(木)	12:00～13:00	赤野井	春季彼岸会法要 法話 中川眞 師（輪番）	赤野井別院
22日(金)	14:00～16:00	伏 見	春季彼岸会 法話 中島正泰 師（丹波第3組 本光寺）	伏見別院
23日(土)	10:00～12:00	岡 崎	春季彼岸会永代経 法話 山雄竜麿 師（大阪教区 以速寺）	岡崎別院
24日(日)・25日(月)		山 科	蓮如上人御正当法要 法話 上場顯雄 師（大阪教区 圓徳寺）	山科別院
25日(月)	19:00～21:00	伏 見	親鸞教室 法話 藤原正寿 師（大谷大学准教授）	伏見別院
27日(水)	14:00～16:00	伏 見	ご命日のつどい 法話 川那辺明 師（山城第2組 西福寺）	伏見別院
27日(水)	12:00～13:00	赤野井	定例法要（宗祖親鸞聖人御命日逮夜）法話 中川眞 師（輪番）	赤野井別院

第 8 回「教勢調査」最終締切日迫る！

最終締切日　3 月 31 日（日）

紙もしくはインターネットでの回答にご協力ください

インターネットでの回答も引き続き可能です。
［回答画面への URL］https://jodo-shinshu.info/ksr/
［回答画面のパスワード］ksr2024

【 調査に関するお問い合わせ 】真宗大谷派企画調整局「教勢調査 事務担当者」［電話］075-371-9208［E-mail］ksr8@higashihonganji.or.jp

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌
『教区だより』第406号
［発行人］篠岡誓法（真宗大谷派京都教務所長）
［発行所］真宗大谷派京都教務所
〒600-8164 京都市下京区花屋町通烏丸西入
Tel:075(351)5260　Fax:075(351)5256

【表紙の写真】啓蟄（石東組 善徳寺 河野恵嗣）
発行日　2024（令和 6）年 3 月 1 日
メールアドレス：kyoto@higashihonganji.or.jp

真宗大谷派 京都教区 Webサイト
https://www.k-kyoku.net
京都教務所　検索